

昭和二十七年十二月一日 初版印刷
昭和二十七年十二月十日 初版發行

昭和文化全集3
寺田寅彥集

著者 寺田寅彥

發行者 角川源義

印刷者 中内佐光

東京都千代田區飯田町一ノ二三

發行所

東京都千代田區
富士見町二ノ七

角川書店

振替東京一九五二〇八
電話九段一〇九四・八七〇八

本文紙 本州製紙株式會社
クローズ 日本クローズ工業株式會社
印刷所 曉印刷株式會社
製本所 宮田製本所

寺田寅彦集

昭和文學全集
角川書店版

目次

卷頭寫眞
筆蹟

・藪柑子集・

・團栗、
龍舌蘭
伊太利人
まじよりか皿、

冬彦集

電車と風呂
丸善と三越
田園雜感
厄年と etc.
蜂が團子をこしらへる話
案内者

萬華鏡

電車の混雜に就て
怪異考
化物の進化

續冬彦集

浮世繪の曲線
解かれた象

備忘録
年賀狀
野球時代
映畫時代
青衣童女像
讀書の今昔
「手首」の問題

蒸發皿

生ける人形

夏目漱石先生の追憶
田丸先生の追憶
火事教育

ニユース映畫と新聞記事
銀座アルプス
珈琲哲學序説
蒸發皿
記録狂時代
涼味數題
神話と地球物理學
試驗管

物質と言葉

北氷洋の水の破れる音

科學者とあたま

觸媒

猿蟹合戦と桃太郎

思出草
ジャーナリズム雜感
ビタゴラスと豆
喫煙四十年
藤棚の蔭から
鳶と油揚
地圖を眺めて

螢光板

破片

西鶴と科學
詩と官能
物賣りの聲
五月の唯物觀
自由畫稿
B教授の死
俳句の精神

柿の種

橡の實

橡の實一

橡の實二

四三九七

四三九七

四三九七

二〇

二〇

二〇

二〇

二〇

二〇

二〇

二〇

二〇

二〇

二〇

二〇

二〇

二〇

二〇

二〇

二〇

二〇

二〇

二〇

二〇

二〇

二〇

二〇

二〇

二〇

二〇

二〇

二〇

二〇

二〇

二〇

二〇

二〇

二〇

二〇

二〇

二〇

二〇

二〇

二〇

二〇

二〇

二〇

二〇

二〇

二〇

二〇

二〇

二〇

二〇

二〇

二〇

二〇

椽の實三

椽の實四

絲車

映畫と生理

三斜晶系

埋もれた漱石傳記資料

椽の實五

雲の話

或る幻想曲の序

廿四年前

子規の追憶

映畫藝術

緒言

映畫藝術の特異性

映畫の成立

映畫の編輯過程

映畫と連句

映畫と夢

前衛映畫

抽象映畫

發聲映畫

有色映畫

立體映畫

人工映畫

映畫と國民性

三五

科學と文學

緒言

言葉としての文學と科學

實驗としての文學と科學

記録としての文學と科學

藝術としての文學と科學

文學と科學の國境

隨筆と科學

廣義の「學」としての文學と科學

通俗科學と文學

ジャーナリズムと科學

文章と科學

結語

西遊通信

小宮豐隆氏への手紙

俳句

解説

年譜

角川源義

三四六

二六〇

二六二

二六四

二六九

二九一

二〇〇

二一〇

二二〇

二〇二

二〇三

二〇七

二〇九

二一一

二二二

二二四

二二四

二二四

二二七

二二七

二二八

二二九

三二

三三

三六

三八

三九

四〇

四一

四二

四三

四四

四五

望九

一五〇

一七七

二二二

二四二

一四五

寺田寅彦集

喜の江は

宮の主人

雨端に
昔の
水

別
丸
代

渡歐の小宮豊隆氏送別の句

(大正十二年三月錦水にて)

藪柑子集

團栗

もう何年前になるか思ひ出せぬが日は覺えて居る。暮もおし詰つた廿六日の晩、妻は下女を連れて下谷摩利支天の縁日へ出掛けた。十時過ぎに歸つて来て、袂からおみやげの金鑢と燒栗を出して余のノートを讀んで居る机の隅へそつとのおせて、便所へはひつたがやがて出て来て着い顔をして机の側へ坐ると同時に急に咳をして血を吐いた。驚いたのは當人ばかりではない、其時余の顔に全く血の氣が無くなつたのを見て、一層氣を落したと此れはあとで話した。

翌る目下女が藥取りから歸ると急に暇をくれと云ひ出した。此邊は物騒で、御使に出るに乾度いやな悪戯をされますので、どうも恐ろしくて不氣味で勤まりませぬと妙な事を云ふ。しかし見る通りの病人をかゝへて今急におまへに歸られては途方にくれる。せめて代りの人のある迄辛抱してくれと、よしやまだ一介の書生にしろ、兎に角一家の主人が泣かぬばかりに頼んだので、其日はどうやら思ひ

止つたらしかつたが、翌日は國許の親が大病とか云ふ譯でとう／＼歸つてしまふ。掛取に來た車屋の婆さんに頼んで、何でもよいからと桂庵から連れて來てもらつたのが美代と云ふ女であつた。仕合せと此れが氣立のやさしい正直もので、尤も少しぼんやりして居て、狸は人に化けるものだといふやうな事を信じて居たが、兎に角忠實に病人の看護もし、叱られても腹も立てず、そして時にしくじりもやつた。手水鉢を座敷の眞中で取落して洪水を起したり、火燵のお下りを入れて寢て蒲團から鼻まで徑一尺程の燒灰をこしらへた事もあつた。それにもかゝはらず余は今に到る迄此美代に對する感謝の念は薄らぐぬ。

病人の容體は善いとも悪いともつかぬうちに歳は容捨なく暮れてしまふ。新年を迎へる用意もしなければならぬが、何を買つてどうするものやらわからぬ。それでも美代が病人の指圖を聞いて其れに自分の意見を交せて一日忙しさうに働いて居た。大晦日の夜の十二時過ぎ、障子のあんまりひどく破れて居るのに氣が付いて、外套の頭巾をひつかぶり、皿一枚をさげて森川町へ五厘の糊を買ひに行つたりした。美代は此夜三時過ぎ迄結び菫蕪をこしらへて居た。

世間は目出度いお正月になつて、暖い天氣が續く。病人も少しづつよくなる。風の無い日は縁側の日向へ出て來て、紙の折鶴をいくつとなくこしらへて見たり、祕藏の人形の讀

物を縫うてやつたり、曇つた寒い日は床の中川越圖書館で「黒髮」を弾く位になつた。そして時々心細い愚痴つばい事を云つては余と美代を困らせる。妻は其頃もう身重になつて居たので、この五月には初産と云ふ女の大難をひかへて居る。おまけに十九の大厄だと云ふ。美代が宿入りの夜など、木枯の音にまじる隣室の淋しい寢息を聞きながら机の前に坐つて、ラムプを見つめたまゝ、長い息をすることもあつた。妻は醫者の間に合ひの氣休めをすつかり信じて、全く一時的な氣管の出血であつたと思つて居たらしい。さうでないと思ひたくなかつたのであらう。それでも何處にか不安な念が潜んで居るのを見て、時々「ほんとうの肺病だつて、なほならないと極つた事はないのせうね」とこんな事をきいた事もある。又或時は「あなた、かくして居るでせう。又さうだ、あなたさうでせう」とうるさく聞きながら、余の顔色を讀まうとする、其祈るやうな氣遣はしげな眼づかひを見るのが苦しいから「馬鹿な、そんな事はないと云つたらない」と邪慳な返事で打消してやる。それでも一時は満足する事が出來たやうであつた。

病氣は少しづつよい。二月の初には風呂にも入る、髪も結ぶやうになつた。車屋の婆さんなどは「もうスツカリ御全快ださうで」と、獨りできめてしまつて、そつと懷から勘定書を出して「どうも大變に、お早く御全快で」と云ふ。醫者の所へ行つて聞くと、善いとも

悪いとも云はず、「なにしろ丁度御妊娠中ですからね、此五月が餘程御大事ですよ」と心細い事を云ふ。

それにも拘らず少しづつよい。月の十日、風のない暖い日、醫者の許可を得たから植物園へ連れて行つてやると云ふと大變に喜んだ。出掛けるとなつて庭へ下りると、髪があんまりひどいから一寸撫で付ける迄待つて頂戴と云ふ。懐手をして縁へ腰掛けて淋しい小庭を見廻はす。去年の枯菊が引かれた儘で、あはれに朽ちて居る、それに千代紙の切れか何かと引掛つて風のないのに、寒さうに顫へて居る。手水鉢の向ひの梅の枝に二輪ばかり満開したのがある。近付いてよく見ると作り花がくつつけてあつた。大方病人のいたづららしい。茶の間の障子のガラス越しに覗いて見ると、妻は鏡臺の前へ坐つて解かした髪を握つてばらりと下げ、櫛をつかつて居る。一寸撫でつけるのかと思つたら、自分で新たに巻き直すと思える。よせばよいのに、早くしないかと急ぎ立て、おいて、座敷の方へ戻つて横になつて今朝見た新聞をのぞく。早くしないかと大聲で促す。そんなに急ぎ立てると、なほ出来やしないわと云ふ。黙つて囊所の横をまはつて門へ出て見た。往來の人がじろく見て通るから仕方なしに歩き出す。半町ばかりぶら／＼歩いて振り返つても未だ出て來ぬから、又引返してもと來た通り囊所の横から縁側へまはつて覗いて見ると、

妻が年甲斐もなく泣き伏して居るのを美代がなだめて居る。あんまりだと云ふ。一人で何處へでもいらつしやいと云ふ。まあ兎も角もと美代がすかしなだめて、やつと出掛ける事になる。實に好い天氣だ。「人間の心が蒸發して霞になりさうな日だね」と云つたら、一問ばかり後を雪駄を引きずりながら、大儀さうについて來た妻は、エ、と氣の無い返事をして無理に笑顔をこしらへる。此時始めて氣が付いたが、成程腹の帶の所が人並より大分大きい。あるき方が餘程變だ。それでも當人は平氣でくつついて來る。美代と二人でよこせばよかつたと思ひながら、無言で歩調を早める。植物園の門をはひつて眞直ぐに廣いだらだら坂を上つて左に折れる。穩かな日光が廣い園に一杯になつて、花も緑もない地盤はさながら眠つたやうである。温室の白塗りがキラ／＼するやうで其前に二三人懐手をして窓から中を覗く人影が見えるばかり、噴水も出て居ぬ。睡蓮もまだつめた泥の底に眞夏の雲の影を持つて居る。温室の中からガタガタと下駄の音を立て、田舎の婆さん達が四人、狐につまゝれた様な顔をして出て來る。余等は之と入れちがつてはひる。活力の充ちた、しめつぽい熱帯の空氣が鼻の孔から腦を襲ふ。椰子の樹や琉球の芭蕉などが、今少し延びたら、此屋根をどうする積りだらうといつも思ふのであるが、今日もさう思ふ。爪哇と云ふ國には肺病が皆無だと誰れかの云

つた事を思ひ出す。妻は濃緑に朱の斑點の入つた草の葉をいちつて居るから「オイ止せ、毒かも知れない」と云つたら、慌てゝ放して、いやな顔をして指先を見つめて一寸嗅いで見る。左右の廻廊には處々赤い花が咲いて、其中からのんきさうな人の顔もあちこちに見える。妻はなんだか氣分が悪くなつたと云ふ。顔色は大して悪くもない。急に生温い處へはひつた爲めだらう。早く外へ出た方がよい、おれはもう少し見て行くからと云つたら、一寸ためらつたが、おとなしく出て行つた。紅い花だけ見てすぐ出る積りで居たら、人と人との間へはさまつて、ちよつと出損なつて、やつと出て見ると妻は其處には居ぬ。何處へ行つたかと思廻はすと、遙か向ふの東屋のベンチへ力無ささうに凭れたまゝ、こつちを見て笑つて居た。

園の静けさは前に變らぬ。日光の目に見えぬ力で地上の凡ての活動をそつと抑へ付けてある様に見える。氣分はずつかりよくなつたと云ふから、もうそろ／＼歸らうかと云ふと、少し驚いたやうに余の顔を見つめて居たが、折角來たから、もう少し、池の方へも行つてみませうと云ふ。それもさうだと其方へ向く。

崖を下りかゝると下から大學生が二三人、黄色い聲でアリストートルがどうしたとか云ふやうな事を議論しながら上つて來る。池の小島の東屋に、三十位の眼鏡をかけた品の好

い細君が、海軍服の男の兄と小さい女の兄を遊ばせて居る。海軍服は小石を拾つては氷の上をすべらせて快い音を立て、居る。ベンチの上には皺くちやの半紙が攪げられて、其上にカステラの大きな片がのつて居る。「あんな女の兄が欲しいわねえ」と妻がいつにない事を云ふ。

出口の方へと崖の下をあるく。何の見るものもない。後で妻が「おや、團栗が」と不意に大きな聲をして、道脇の落葉の中へはひつて行く。なる程、落葉に交つて無数の團栗が、凍つた崖下の土にころがって居る。妻は其處へしやがんで熱心に拾ひはじめ。見る間に左の掌に一杯になる。余も一つ二つ拾つて向ふの便所の屋根へ投げると、カク／＼と轉がつて向側へ落ちる。妻は帯の間からハンケチを取り出して膝の上へ攤げ、熱心に拾ひ集める。「もう大概にしないか、馬鹿だな」と云つて見たが、中々止めさうもないから便所へ入る。出て見るとまだ拾つて居る。「一體そんなに拾つて、どうしようかと云ふのだ」と聞くが、面白さうに笑ひながら、「だつて拾ふのが面白いやありませんか」と云ふ。ハンケチに一杯拾つて包んで大事さうに縛つて居るから、もう止すかと思ふと、今度は「あなたのハンケチも貸して頂戴」と云ふ。とうとう余のハンケチにも何合かの團栗を充たして「もう止してよ、歸りませう」と何處迄もいゝ氣な事をいふ。

團栗を拾つて喜んだ妻も今はない。御墓の土には昔の花が何遍か咲いた。山には團栗も落ちれば、鶯の啼く音に落葉が降る。今年の二月、あけて六つになる忘れ形身のみつ坊をつれて、此植物園へ遊びに来て、昔ながらの團栗を拾はせた。こんな些細な事に迄、遺傳と云ふやうなものがあるものだから、みつ坊は非常に面白がつた。五つ六つ拾ふ毎に、息はずませて余の側へ飛んで来て、余の帽子の中へひろげたハンケチへ投げ込む。段々得物の増して行くのをぞき込んで、頬を赤くして嬉しさうな溶けさうな顔をする。争はれぬ母の面影が此無邪氣な顔の何處かの隅からチラリとのぞいて、うすれかゝつた昔の記憶を呼び返す。「おとうさん、大きな團栗、こいもこいもく／＼く／＼みんな大きな團栗」と小さい泥だらけの指先で帽子の中に果々とした團栗の頭を一つ一つ突つて、「大きい團栗、ちいさい團栗、みんな利口な團栗ちゃん」と出たらめの唱歌のやうなものを歌つて飛び飛びしながら又拾ひ始める。余は其罪のない横顔をじつと見入つて、亡妻のあらゆる短所と長所、團栗のすきな事も折鶴の上手な事も、なんにも遺傳して差支へはないが、始めと終りの悲惨であつた母の運命だけは、此兒に繰返させ度くないものだ、しみ／＼さう思つたのである。

(明治三十八年四月、ネトトギス)

龍舌蘭

一日じめ／＼と、人の心を腐らせた霧雨もやんだやうで、靜かな宵闇の重く濕つた空に、何處かの汽笛が長い波線を引く。さつき迄「青葉茂れる櫻井の」と繰返して居た隣のオルガンが止むと、間もなく門の鈴が鳴つて軒の葉櫻の雫が風ののいのにばら／＼と落ちる。「初習様だ、あすはお天気だよ」と勝手の方で婆さんが獨り言を云ふ。地の底空の果から聞えて来る様な重々しい響が腹にこたへて、晝間讀んだ悲惨な小説や、隣の「青葉しげれる櫻井の」やらが、今更に胸をかき亂す。こんな時には何時もするやうに、机の上を腕を突いて、頭をおさへて、何もない壁を見詰めて、あつた昔、ない先きの夢幻の影を追ふ。何だか思ひ出さうとしても、思ひ出せぬ事があつてうつとりして居ると、雷の音が今度は稍近く聞えて、ふつと思ひ出すと共に、あり／＼目の前に浮んだのは、雨に濡れた龍舌蘭の鉢である。

河野の義さんが生れた歳だから、もう彼は十四五年の昔になる。自分もまだやつと十か十三位であつたらう。来る幾日義雄の初節句の祝をしますから皆さん御出下さるやうにとチョン醬の兼作爺が案内に来て、其時に貰つた紅白の餅が大きかつた事も覚えて居る。い

よい其日となつて、母上と自分と二人で、車を出掛けた。折柄の雨で車の中は窮屈であつた。自分の住つて居る町から一里半餘、石ころの田舎道をゆられながらやつと姉さんの宅へ着いた。門の小流の嵩薄も雨にしほれて居る。もう大勢客が来て居て母上は一人々々に懇に一別以來の辭儀をせられる。自分は其後に小さくなつて手持無沙汰で居ると、折よくこゝの俊ちやんが出て来て、待ち兼ねて居たと云ふ風で自分を引張つて御池の鯉を見に行つた。姉さん處には池があつて好いと子供心に羨しく思つて居た。池は一寸した中庭に一杯になつて居て、門の小川の水が表から床下をくゞつて此池へ通ひ裏田圃へぬける様にしてある。大きな鯉、絆鯉が澤山飼つてあつて、此頃の五月雨に増した濁り水に、おとなしく泳いで居ると思ふと折々凄まじい音を立てはね上る。池の圍りは岩組になつて、瘦せた巻柏、櫻櫛竹杯が少しあるばかり、そして隅の扁たい岩の上に大きな龍舌蘭の鉢が乗つて居る。姉さんが此家へ興入になつた時、始めてこの鉢を見て珍しい草だと思つたが、今でも故郷の姉を思ふ度には屹度此池の龍舌蘭を思ひ出す。今思ひ出したのは此鉢であつた。

池を距て、池の間と名の付いた此小座敷の向ひ側は、臺所に續く物置の板葺の、其上が一寸しやれた中二階になつて居る。

あの頃の田舎の初節句の祝宴は大抵二日續

いたもので、親類縁者は勿論、平素は餘り往來せぬ遠縁のいとこ、はとこ迄、中には随分遠くからはる／＼泊りがけで出て来る。それから近村の小作人、出入の職人まで寄り集つて盛んな祝であつた。近親の婦人が總出で杯盤の世話をし、酌をする。その上、町から藝者を迎へて興を添へさせるのが例なので此時居るので池の向ふの中二階は此藝者の化粧部屋にも休憩所にも又寢室にもなつて居た。

夕方近くから夜中過ぎる迄、家中唯眼のまはる程忙しい騒がしい。臺所では皿鉢のふれ合ふ音、庖丁の音、料理人や下女等の無作法な話聲など一通り騒がしい上に、猫、犬、それから雨に降り込められて土間へ集つて居る鶏迄が一層の賑かさを添へる。裏の間、表座敷、玄關とも云はず、一杯の人で、それが一人々々に御辭儀をしては六ヶしい挨拶を交換して居る。

其混雑の間をくゞり、御辭儀の頭の上を踏み越さぬばかりに杯盤酒肴を座敷へはこぶ往來も見ること忙し。子供等は仲間が大勢出来た嬉しさで威勢よく駆け廻る。一體自分には其頃から陰氣な性で、こんな騒ぎが面白くないから、いつもの様に宵の内は加減御馳走を食つてしまふと奥の藏の間へ行つて戸棚から八犬傳、三國誌などを引つぱり出し、おなじみの信乃や道節、孔明や關羽に親しむ。此室は女の衣裳を青更へる處になつて居たの

で、四面にずらりと衣桁を並べ、衣紋竹を掛けつらねて、派手なやら、地味なやらいろいろな着物が、蠅干の時の様に並んで居る。白粉臭い、汗くさい變な香が籠つた中で、自分は信乃が濱路の幽霊と語るくだりを讀んだ。夜の更けるにつれて、座敷の方は段々賑かになる。調子を合す三味線の音がすると、清らかな女の聲で唄ふのが手に取る様に聞える。調子はづれの鄙歌が一度に起つて思ふをたゞく音もする。しきり唄が止んだと思ふと、不意に鞭聲と誰れやうがいな聲でわめく。

信乃が腕を括いてうづむいて居る濱路の後に、影の様に現はれた幽霊の繪を見て居た時、自分の後の唐紙がする／＼と開いて、はひつて来た人がある。見ると年増の方の藝者であつた。自分にはかまはず片隅の衣桁に懸つて居る着物の袂をさぐつて何か帯の間へはさんで居たが不意に自分の方をふり向いて「あちらへいらつしやいね、坊ちゃん」と云つた。そして自分の傍へ膝のふれる程に坐つて「オ、いやだ、御化け」と繪をのぞく。髪の毛が匂ふ。二人でだまつて無心に此繪を見て居たら誰れか「清香さん」とあつちの方で呼ぶ。藝者はだまつて立つて部屋を出て行つた。

俊ちやんと二人で奥の間で寢てしまつた頃

翌の日も朝から雨であつた。昨夜の騒ぎにひきかへて靜か過ぎる程靜かであつた。男は

表の座敷、女同志は奥の一間へ集つて、しめやかに話して居る。母上は姉さんと押入から子供の着物など引きちらして何か相談して居る。新聞を擡げた上に居眠りを始めて居る人もある。酒の匂の籠つた重くるしい鬱陶しい空氣が家の中に充ちて、誰れも彼れも、とんと氣拔のした様な風である。臺所では折々トシ、ユトシと魚の骨でも打つらしい單調な響が靜かな家中にひびいて、それが又一種の眠氣をさそふ。中二階の方で、つま引の三絃の音がして「夜の雨もしや來るか」とつやのある低い聲で唄ふ。それもぢき止んで五月雨の軒の玉水が距鎧のとゆに咽んで居る。骨を打つ音は思ひ出した様に臺所にひびく。

晝から俊ちやんなど、ぢき隣の新宅へ遊びに行つた。内の人は皆姉さんの方へ手傳に行つて居るので、唯中氣で手足の利かぬ祖父さんと雇婆さんが居るばかり、いつもは賑かな家もひつそりして、床の間の金太郎や鍾馗も淋しげに見えた。十六むさし、將基の駒の當てつこなどして見たが氣が乗らぬ。縁側に出て見ると小庭を圍ふ低い土塀を越して一面の青田が見える。雨は煙の様で、遠くもない八幡の森や衣笠山もぼんやりじんだ墨繪の中に、薄く萌黄をほかした稻田には、草取る人の笠が黄色い點を打つて居る。ゆるい調子の、眠さうな草取歌が聞える。歌の詞は聞き取れぬが、單調な悲しげな節で消え入るやうに長く引いて、一ふしが終ると、しばらく

黙つて又ゆるやかに歌ひ出す、此れを聞いて居ると何だか胸をおさへられるやうで急に姉さんの宅へ歸りたくなつたから一人で歸つた。歸つて見るともうそろ／＼客が來始めて、例のうるさい御辭儀が始つて居る。さつきから頭が重いやうで、氣が落付かぬ様で人に話しかけられるのがいやであつたから、獨りで藏の間へ入つて八犬傳を見たが、すぐいやになる。鯉でも見ようと思つて池の間へ行つて見た。縁側の柱へ頭をもたせてぼんやり立つ。水かさのました稻田から流れ込んだ浮草が、ゆるやかに廻りながら、水の面へ雨のしづくが晝いては消し、晝いては消す小さい紋と一緒に流れて行く。鯉は片隅の岩組の陰に仲好く集つたまゝ靜かに鰭を動かして居る。龍舌蘭の厚いとげのある葉が濡れ色に光つて立つて居る。中二階の池に臨んだ丸窓には、昨夜の清香の淋しい顔が見える。窓の縁に頰杖をついたまゝ、何やら物思はしさうに薄墨色の空の彼方を見つめて居る。こめかみに貼つた頭痛膏にかゝる後れ毛を撫でつけながら、自分の方を向いたが、輕くうなづいて片頬で笑つた。

夕方母上は、あんまり内をあけてはと云ふので、姉上の止めるのにかゝはらず歸る事になつた。「お前も歸りませうね」と聞かれた時、歸るのが何だか名残り惜しい様な氣もした。「ウン」と鼻の中で曖昧な返事をする。姉さんが「此兒はいゝでせう。ねえ、お前もう

一晩泊つておいで」とすゝめる。之れにも「ウン」と鼻で返事する。「泊るのはいいが姉さんに世話をおかけでないよ」と云つていよいよ一人で歸る支度をせられる。立場迄迎にやつた車が來たので姉さんと門迄送つて出た。車が柳の番所の辻を曲つて見えなくなつた時急に心細くなつて、一緒に歸ればよかつたと思ふ。「さあ御出で」と姉さんは引立てる様に内へはひる。

頭の工合がいよ／＼悪くなつて心細い。母上と一緒に歸ればよかつたと心で繰返す。煙る霧雨の田圃道をゆられて行く幌車の後影を追ふ様な氣がして、なつかしい我家の門の柳が胸にゆらく。騒々しい、殺風景な酒宴に何の心残りがあつて歸りそこなつたのか。歸りたい、今からでも歸りたいと便所の口の縁へ立つたまゝ南天の枝にかゝつてある紙のてゐてる坊さんに祈るやうに思ふ。雨の日の黄昏は知らぬ間に忍足で軒に迫つて早や灯ともし頃の佻しい時刻になる。家の内は段々賑かになる。はしやいだた笑聲などが頭に響いて佻しさを増すばかりである。

姉上に、少し心持が悪いからと、云ひにくかつたのをやと云つて早く床を取つてもらつて寝た。萌黄地に肉色に大きく鶴の丸を染め抜いた更紗蒲團が今も心に残つて居る。頭が牙えて眠れさうもない。天井に吊るした金銀色の蠅除け玉に寫つた小さい自分の寢姿を見て居ると、妙に氣が遠くなる様で、體が

段々落ちて行く様な何とも知れず心細い氣がする。母上はもううちへ歸りついて奥の佛壇の前で何かして居られるかと思ふと譯もなく悲しくなる。姉さんのうちが賑かなのに比べて我家の淋しさが身にしむ。いろんな事を考へて夜着の領を噛んで居ると、涙が限じりかこめかみを傳うて枕にしみ入る。座敷では「夜の雨」を唄ふのが聞える。池の龍舌蘭が眼に浮ぶと、清香の顔が見えて片頬で笑ふ。

此夜凄まじい雷が鳴つて雨雲を蹴散らした。朝はすつかり晴れて強い日光が青葉を射て居た。早起して顔を洗つた自分の頭もせいせいして、勇ましい心は公園の球投げ、樋川の夜振と駈けめぐつた。

義ちゃんは立派に大きくなつたが、龍舌蘭は今はない。

雷はやんだ。あすは天氣らしい。

(明治三十八年六月、サトトギス)

伊太利人

今日七軒町迄用達しに出掛けた歸りに久し振りで根津の蕪染町を通つた。親友の黒田が先年迄下宿して居た荒物屋の前を通つた時、二階の欄干に青い汚れた毛布が干してあつて、障子の少し開いた中に皺くちやに吊し

た袴が見えて居た。なんだかなつかしいやうな氣がした。黒田が此處に居たのはまだ學校に居た頃からで、自分は殆んど毎日のやうに入出したから主婦とも古い馴染ではあるが、黒田が居なくなつてからは妙に疎くなつてしまつて、今日も店に人の居なかつたのを却つて仕合せに聲もかけずに通り過ぎた。併し此家の二階は何となくなつかしい、昔の香がする。二階と言つて別に眺望が佳いのもなければ、座敷が綺麗だといふ譯でもない。前にはユケラ葺や、古い瓦屋根に草の茂つた貸長屋が不規則に並んで、其向ふには洗濯屋の物干が美しい日の眼界を遮ぎる。右の方に少し許り空地があつて、其の眞上に向ヶ岡の寄宿舎が聳えて見える。春の頃など夕日が本郷臺に沈んで赤い空に此の高い建物が紫色に浮き出して見える時などは、之れが一つの眺めになつた位のものである。しかし間近く上野をかへて居るだけに、何處か明るい花やかな處もあつた。花の時分などになると何となく春のどよみが森の空に聞えて窓の下を美しい人の群が通る事もあつた。欄干にもたれて何かしんみりした話でもして居る時、程近い時の鐘が重々しいうなりを傳へて遠くに消えることもあつた。

一體黒田は子供の時分から逆境に育つて随分苦しい思ひをして來た男だけに世間に對する考へもふけて居て、深い眼の底から世の中を横に眺んだ様な處があつた。觀察の鋭い

そしていつも物の暗面を見たがる癖があるの
で、人からは寧ろ憚られて居た爲か、平生
親しく往來する友も少かつた。其のひねくれ
た様な處が妙に自分と氣が合つたのも不思議
である。自分はどうかかうか世間並の坊ちや
んで成人し、黒田の様な苦勞の味をなめた事
もない。黒田の昔話を小説の様な氣で聞いて
居た。月々郷里から學費を貰つて金の心配も
なし、此上氣楽な境遇はなかつた筈である
が、若い心には氣楽無事だけでは物足りなかつた。きまり切つた日々の課業をして暇な時
間を無意味に過すや云ふ様な事が寧ろ堪へ難
い苦痛であつた。唯何かしら絶えず刺戟が欲
しい。快樂とか苦痛とか名の付く様なもので
なく、何んだか分らぬ目的物を遠い霞の奥に
望んで、それをつかまへようつかまへようと
して居た。小説を讀んだり白馬會を見に行つ
たり又音楽會を聞きに行つたりして居る内には
求めて居る物に近づいた様な氣がする事も
あつたが、つい眼の前の物に手の届かぬ様な
悶かしい感じが残る許りである。こんな事を
話すと黒田はいつも快く笑つて「青春の贅澤」
は出來る時にして置くさと言つた。半日も下
宿に籠つて見厭きた室内、見厭きた庭を見て
居ると堪へられなくなつて飛出す。黒田を誘
うて當もなく歩く。咲く花に人の集る處を廻
つたり殊更に淋しい墓場杯を尋ね歩いて行く
。黒田は之れを「浮世の匂」をかいで歩く
のだと言つて居た。一緒に歩いて居ると、見

る物聞く物黒田が例の奇警な觀察を下すのでつまらぬ物が生きて来る。途上の人は大きな小説中の人物になつて路傍の石塊にも意味が出来る。君は文學者になつたらいいだらうと自分は言つた事もあるが、黒田は醫科をやつて居た。

あの頃よく話の種になつた伊太利人がある。名をデューセツポ・ルツサナとかいつて、黒田の宿の裏手に小さな家を借りて何處かの語學校とかへ通つて居た。細君は日本人で子供が二人、末のはまだほんの赤ん坊であつた。下女も置かずに、質素と云ふよりは寧ろ極めて賤しい暮しをして居た。日本へ来て居る外國人には珍しい下等な暮しをして居たが、しかし月給は可也澤山に取つて居るといふ噂であつた。日本へ来て居るのは金をこしらへる爲めだから、なんでも出来るだけ儉約するのですと彼自身人に話したさうである。

黒田の居た二階の縁側に立つて見ると、裏の堀越しに伊太利人の家の庭から縁側が見下される。二間あるかなしの庭に、植木といつたら柘榴、か何かの見すばらしいのが一株塀の陰にある許りで、草花の鉢一つさへない。今頃なら霜解を踏み荒した土に紙屑や布片などが淺猿しく散らばりへばりついで居る。晴れた日には庭一面におしめやシャツの様な物を干す、軒下には籠詰の殻やら横緒の切れた泥塗れの女下駄などがころがつて居る。雨の日には縁側に乳母車があがつて、古下駄が雨垂

れに濡れて居る。家の中迄は見えぬがきたなさは想像が出来る。細君からして随分こんな事には無頓着な人と見える。どうせあんな異人さんのおかみさんになる位の人だからと下宿の主婦は説明して居たさうな。しかし細君は極く大人しい好人物だといふので近所の氣受けは餘り悪い方ではなかつたらしい。

主人のデューセツポの事を近所ではデューーちやんと呼んで居た。出入の八百屋が言ひ出してからみんなデューーちやんといふ様になつたさうである。自分は折々往來で自轉車に乗つて行くのを見かけた事がある。大きなからだを猫背に曲げて陰氣な顔をしていつでも非常に急いで居る。眉の間に深い皺をよせ、血眼になつて行手を見つめて驅けつて居るさまは餓多た熊鷹が小雀を追ふ様だと黒田が評した事がある。休日などはよく縁側の日向で赤ん坊をすかして居る。上衣を脱いでシャツばかりの胸に子供をシツカリ抱いて、をかした聲を出しながら狭い縁側を何遍でも行つたり來たりする。そんな時でも恐ろしく眞面目で沈鬱で一心不乱になつて居る様に見える。こちらの二階で話し聲がして居ても少しも目もくすぶつて居る。併し子供が可愛くてならぬといふ風でもない。唯一心に何事かに凝り固まつて世間の風が何處を吹くのも知る餘裕がないといった様である。自分は此んな場合を見かけるとなんだか可笑しくもあり又氣の毒な

氣がした。黒田はあれは此の世界に金を溜める以外何物もない儂れな男だと言つて居た。五厘だけ安いといふので石油の罐を自轉車にぶらさげ、下谷の方まで買ひに出かけるといふ事であつた。八百屋などが來ると自分で臺所へ出かけてやかましく値切り小切りをする。大根を齧で喰ひ缺いて見て此れはいけなると云つて突返したりする。煮焚の事でも細君にはやらせないで獨りで臺所で何かガチャつかせながらやつて居た。

花を尋ねたり、墓を訪うたり、美しい夢ばかり見て居たあの頃の自分には、此の伊太利人は暗い黄泉の間に荒金を掘つて居る亡者か何かの様に思はれた。兎に角一種侮蔑の念を抑へる譯に行かなかつた。日露戦争の時分には何でも露西亞の方に同情して日本の連捷を呪ふやうな口物があつたとかで或は隠探ぢやないかといふ噂も立つた。こんな事でひどく近所中の感じを悪くしたさうだが、細君の好人物と子供の可愛らしいのとで幾分か融和して居たらしい。子供は髪が黒くて色が白くて美しい。上の男の子はあの頃四つ位で名はエソリヨとかいふさうだが、當り前の和服を着て近所の子供と遊んで居るのを見ては混血兒と思はれぬ様であつた。黒田は此兒を大變に可愛がつてエンチヤン／＼と親しんで居た。父親が金をこしらへあげた曉に此兒の運命はどうなるだらうかと話し合つた事もある。デューセツポの家で時ならぬ嵐が起つて隣家

の耳を聴てさせる事も珍しくない。アクセントのをかしい伊太利人の聲が次第に高くなる。そんな時は細君のことをアナタが〜と云ふ聲が特別に耳立つて聞える。嵐が絶頂になつて、おしまひに細君の駁り泣きが聞え出すと急に黙つてしまふ。そして赤ん坊を抱いて下駄ばきで庭へ出る。憤怒、悲哀、痛苦を一まとめにした様な顔を曇らせて、不安らしく庭をあちこち歩き廻るのである。異郷の空に語る者もない淋しさ佗しさから氣まぐれに拵へた家庭に憂き雲が立つて心が騒ぐのだらう。こんな時にはかたくななヂュセッポの心も、海を越えて遙な伊太利の彼方、オレンヂの花咲く野に通うて騷旅の思が動くのだらうと思ひやつた事もある。細君は珍しいおとなしい女で、口喧ましい夫にかしづく様は寧ろ人の同情をひく位で、つひぞ近所なぞで愚痴をこぼした事もない。従つて此の變つた家庭の成立に就いても細君の元の身分に就いても、何事も確な事は聞かれなかつた。今は黒田も地方へ行つてしまつて伊太利人の話をする機會も絶えた。

こんな事を色々思ひ出して歸つて來ると宅のきたないのが今更の様に目に付く。よごれた疊破れた建具を見まはして居たが、急に思ひついて端書を書いた、久し振りで黒田にこんな事を書いてやつた。

……東京は雪がふつた。千駄木の泥濘はまだ乾かぬ。之れが乾くと西風が砂を捲く。

此泥に重い靴を引きずり、此の西風に逆ふだけでも頬が落ちて眼が血走る。東京はせちがら。君は田舎が退屈だと言つて來た。此頃は定めて益、肥つたらう。僕は毎日同じ帽子同じ洋服で同じ事をやりに出て同じ刻限に家に歸つて食つて寝る。「青春の贅澤」はもう止した。「浮世の匂」をかぐ暇もない。障子は風がもり、疊は毛立つて居る。霜柱にあれた庭を飾るものは子供に變つて來る。美しい物の影が次第に心から消えて行く。金がほしくなる。かつて二階から見下したヂュセッポにいつの間にか似て來るやうだ。墮落か、向上か。どちらか分らない。三月十四日

ペンで細字で考へ〜書いてしまつたのを懐にして表のポストに入れて出した。そして今書いた事を心でもう一遍繰り返しながら、此れを讀んだ時に黒田の苦い顔に浮ぶべき微笑を胸に描いた。

(明治四十一年四月、ホトギス)

まじよりか皿

十二月卅一日、今年を限りと木枯の強く吹いた晩、本郷四丁目から電車を下りて北に向

うた忙がしい人々の中に唯一一人忙がしくない竹村運平君が交じつて居た。小さい新聞紙の包を大事さうにかゝへて電車を下りると立止つて何かまご〜して居たが薄汚い襟巻で丁寧に頭から顔を包んでしまふと歩き出した。ひよる長い支那人のやうな後姿を辻に立つた巡查が肩章を鋒がして寒さうに見送つた。

竹村君は明けるつと卅一になる。四年前に文學士になつてから、しばらく神田の某私立學校で英語を教へて居た。受持の時間に竹村君が教場へはひるときに首席に居る生徒が「氣を付け」「禮」と號令をすると生徒一同起立して恭しくお辭儀をする。そんな事からが妙に厭であつた。そして自分にも碌に分らないやうな事をいゝ加減に教へて居ると、次第々々に自分が墮落して行く様な氣がすると云つて居たが、一年ばかりで〜止してしまつた。さうして月給がなくなつて困る困るとこぼしながら〜して居た。地方の中學に可也に好い口があつて世話しようとした先輩があつたが、田舎は厭だからと素氣なく斷つて了つた。何故田舎が厭だと人が聞くと、田舎は厭ぢやないが田舎の「先生」になつてしまふのが厭だからといつた。夫れで相變らず金を取らなくちや困るといつてこぼして居た。其後一時新聞社へもはひつて居た。半年位通つて眞面目に働いて居たが、自分の骨折つて書いたものが一度も紙上へ載らないので此方も出てしまつた。此頃ではあちこちの

翻譯物を引受けたり、少年雑誌の英文欄などを手傳つて、どうかかうかはやつて居る。時小説のやうな物を書いて雑誌へ出す事もあがるが、兎角の評判もないやうである。自分の小説が何かに出ると、方々の雑誌屋の店先で小説月評といった様な欄をあさつて見るが、いつでも失望するにきまつて居た。

根津邊の汚い下宿屋で極めて不規則な生活を送つて居る。一日何もしないで煙草ばかり吹かして寝たり起きたり四疊半に轉がつて居る事もあれば、朝から出掛けて夜の二時頃迄歸らぬ事がある。さうかと思ふと二三日風呂にも行かず夜更迄机へすがつた切りでコッソリ何か書いたり讀んだりする。そんな時はいかにも苦しさを溜息ばかりして何遍となく便所へはひつて大きな欠伸をする癖がある。朝は大體寢坊をして、之が爲めに晝飯を抜きにする事があるが、其代りに夜の十時頃から近所の牛肉屋へ上つて腹一杯に食ふ事も珍しくない。一體に食ふ方にかけては贅澤で、金のある時には洋食だ餛だど無暗に多量に取寄せて獨りで食つてしまふが、身なりはいつでも見窶らしい風をして、床屋へ行くのは極めて稀である。それでも机の抽斗には小さな鏡が入れてあつて、時によると一時間もラムブの下で鏡を睨めて居る事がある。風采は餘り上らぬ方である。酒を飲まぬ事と一度も外で泊つた事のないのを下宿の主婦が感心して居た。友達といふものは殆んどない。唯一人親

しく往來して居た同窓の男が地方へ就職して行つてからは、別に新しい友も出来ぬ。唯此頃折々牛込の方へ出ると神樂坂上の紙屋の店へ立寄つて話し込んで居る事がある。此紙屋といふのは竹村君と同郷のもので、主人とは昔中學校で同級に居た事がある。いつか偶然に出くはしてからは通りが／＼に聲を掛けて居たが、此頃は容る／＼店先へ腰を下して無駄話をして行く。主人の妹で十九になる娘が居て店の奥の方でちら／＼する時がある。色の白い女學生風な立ち姿の好い女である。暗々とした顔で奥から覗いて美しい眼を見せる時もあるが、又妙に冷い顔をして竹村君などには目もかけぬ時がある。娘の姿のちら／＼する日には竹村君は面白さうに一時間之餘も話し込んで居るが、娘の顔を見せぬ日は自然に口が重くてさうかといつて急に歸るでもなく、朝日を引切りなしに吹かして眞鍮のしきみ火鉢の片隅へ吸殻の山をこしらへる。一週間に一遍位は乾度廻つて来るが、いつ來ても同じやうな話ばかりして居る。店へは郷里の新聞が來て居るので話はよく郷里の噂になる。それから昔の同級生の噂になる。福見や河野が洋行する話や、櫻井が内務省の參事官で幅を利かせて居るやうな話が出ると竹村君は氣の乗らぬ返辭をしてふつと話題を轉るのであつた。

今日も夕刻から神樂坂へ廻つて紙屋の店で暮の街の往來を眺めて居た。店の出入は忙し

さうであつたが主人は相變らず落着いて相手になつて居た。兵隊が幾組も通る。「兵隊も呑氣でいいなあ」と竹村君が云ふと「あなた方も氣樂でせう」といつてにや／＼した。竹村君は「さうさなあ、まあ兵隊の様なものだらう」といつて笑つた。彼は中學校を出るとすぐに生眞面目な紙屋の旦那になつて居る主人と、自分の様な人間との境遇の著しい違ひを思ひ較べて居た。そこへ外から此處の娘が珍しく髪を島田に上げて薄化粧をして車で歸つて來た。見かへる様に美しい。いつになく少しはにかんだ様な笑顔を見せて軽く會釋しなごらいそ／＼奥へはひつた。竹村君は外套の襟の中で首をすくめて手持無沙汰な顔をして娘の脱捨てた下駄の派手な鼻緒を見つめて居たが店の時計が鳴り出すと急に店を出た。

神田の本屋へ廻つて原稿料の三十圓を受取つた。手を切りさうな五圓札を一重ねに折りかへして銅貨と一緒に財布へ押しこんだのを懐に入れて、神保町から小川町をしばらくあちこち歩いて居た。美しさを競うて飾り立てた店先を軒毎に覗き込んで居た。竹村君はかうして店先を覗くのが一つの楽しみである。殊に懐に金のある時にさうである。陰氣な根津邊に燻ぶつて居て、時たま此處らの明るい町の明るい店先へ立つと全く別世界へ出た様な心持になつて何となく愉快である。時計屋だの洋物店の硝子窓を子供のやうにのぞいて歩いた。呉服屋には美しい帯が飾つてあつ